

# ときめき インタビュー



**松浦 真弓**  
まつうらまゆみ / Mayumi Matsuura

## …プロフィール…

昭和40年、草加市生まれ。埼玉県立越谷北高等学校から東海大学短期大学部へ進み、卒業後の昭和61年、宇宙開発事業団（現・JAXA宇宙航空研究開発機構）に入社。新卒入社的女性技術者第1号として、衛星やロケットの軌道追跡、国際宇宙ステーションの実験棟『きぼう』および補給機『こうのとり』のフライトディレクターを担当。現在は筑波宇宙センターで、SSA（宇宙状況把握）システム開発プロジェクトの指揮を執っている。



宇宙ステーション補給機『こうのとり』  
宇宙では秒速7kmの速度で動く

宇宙開発事業団の新卒女性技術者第1号として入社以来、30年以上にわたって第一線で活躍している松浦真弓さん。日本初となる平成20年の有人宇宙実験施設・日本実験棟『きぼう』と、27年の宇宙ステーション補給機『こうのとり』5号機の打ち上げの際は、地上の運用管制チームのリードフライトディレクターを務め、プロジェクトを成功に導くなど輝かしい実績を残しています。

## ★ 宇宙への興味は 先生の一言から

松浦さんが宇宙に興味を持ち始めたのは、小学校低学年のころ。

「理科の授業のとき先生が、『宇宙の果てはまだ誰も知らないんだよ』と言っていました。大人でも知らないことがあるということが当時の私には衝撃的で、それが宇宙に興味を持つきっかけでしたね。その後、中学3年生のときに『コスモス』という宇宙ドキュメンタリー番組を見て、こういう仕事かしたい！と意識するようになった。」

なりました」と松浦さん。

宇宙との通信に必要な知識だろと考えて電波工学を学んでいた大学2年生のとき、男女雇用機会均等法が制定され、朗報が届きました。

「宇宙開発事業団が女性の技術職の募集を始めたぞと、大学の先生が教えてくれました。それまでは技術職は男性しか募集していませんでしたから、もうこれは受けられない、ここしかない！という気持ちでしたね」

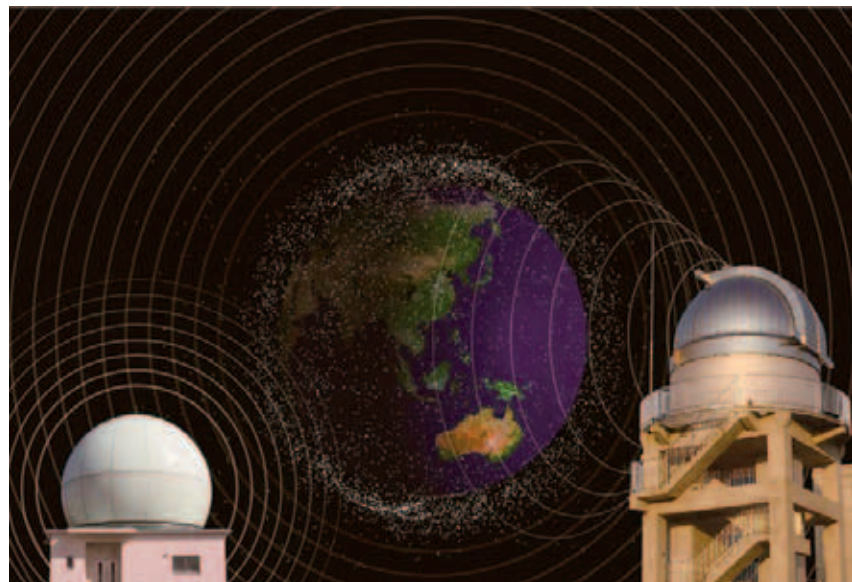
願いが叶って狭き門を突破。松浦さんは女性技術者第1号として

## ★ 「地球を眺めながら 月で一杯」が夢

「チームというのは、各自の能力の足し算ではなく、かけ算で人数以上の成果を上げることだと思っています。チーム全員が気持ちよく仕事できるように配慮して、プロジェクトを成功させるのがリーダーの役割。当然プレッシャーはかかりますが、やりがいを感じる仕事ですね」

人工衛星やロケットの追跡、宇宙ステーションに関わる業務など、宇宙を観る仕事を続けてきた松浦さんには、実現したい夢がある。「地球全体が眺められる場所から、地球は本当に丸いのか、どんな青色をしているのか、オーロラは本当に南極と北極で同時に発生しているのか、自分の目で見てみたいですね。例えば、国際宇宙ステーションの高

度はおおよそ400km。でも、その距離では残念ながら地球全体は見えないんです。全体を見るなら月に行くのがベストかもしれません。誰でも宇宙旅行で月へ行けるようになったら、私も月に行って、地球を眺めながらお酒を飲みたいですね」



松浦さんが開発プロジェクトを率いるSSAシステムのスペースデブリを観測するレーダー（左）と光学望遠鏡（右）のイメージ

越谷に住んでいる人達にも、もっと宇宙を身近に感じてほしい

## 本当に地球は丸いのか、青いのか。 いつか自分の目で見るのが夢なんです。



JAXA 追跡ネットワーク技術センター SSAシステムフライトエンジニア

まつうら まゆみ 松浦 真弓 さん

筑波宇宙センターの展示館にある日本実験棟『きぼう』の実物大模型。 大きい装置のため、打ち上げは3回に分けて行われたそう

## ★ 10年越しの『きぼう』 打ち上げ成功

入社当初は、すでに宇宙で稼働している人工衛星を追跡し、軌道や姿勢のずれを計算して修正する業務を担当していました。

「最近の人工衛星は、自動で軌道や姿勢を調整できるものもありますが、当時は地上でコントロールしなければならぬ衛星がほとんどでした。最初に配属された部署は、大学の研究室のような雰囲気があった、働きながら勉強している感じで楽しかったですね」

その後、ロケットの追跡業務などの経験を経て、入社13年目の平成10年に国際宇宙ステーションに設置する日本実験棟『きぼう』の運用管制チームのメンバーとなります。

## ★ 3拠点に日本人が そろった奇跡

『きぼう』の成功によって、日

本が国際宇宙ステーションの一員となる使命を果たした松浦さん

人だろと。そういう視点で見れば宇宙が身近に感じられて、興味を持ってもらいやすいかなと思います。筑波宇宙センターにある展

示館では、『きぼう』や『こうのとり』などの実物大の模型を見ることが出来ます。皆さんに来てもらえたらうれしいです」